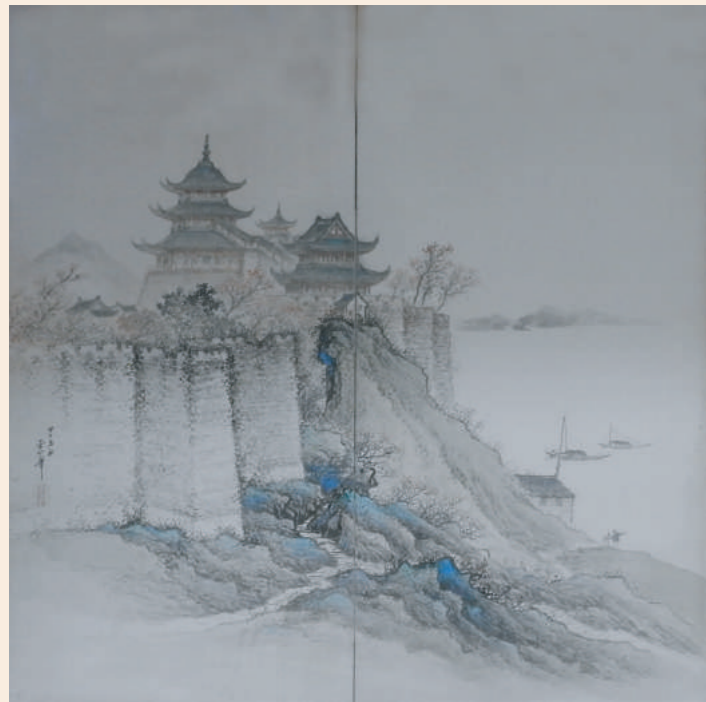
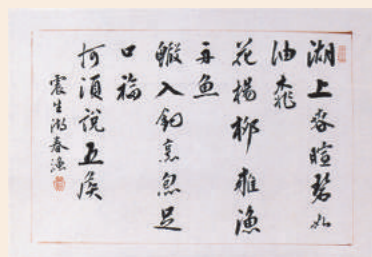


屏風

本展では、金剛寺に納められた二曲一双の『^{にきよくいつそう}楼閣山水図屏風』など、雲山作品の中でも大作である屏風を展示している。



『楼閣山水図屏風』二曲一双 金剛寺蔵

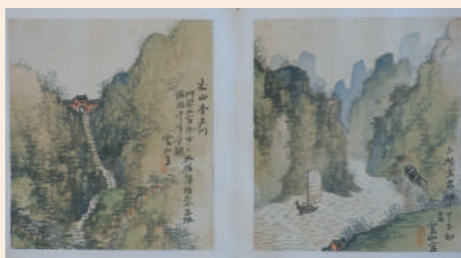


秦野

帰郷後、雲山は秦野を題材にした作品を手がけている。中国山水画の伝統的な画題である瀟湘八景を秦野に置き換えた作品も見受けられる。

『秦野八勝』九幅対 秦野市所蔵
※画像は『震生湖春魚』

画帖



『画帖』一冊 個人蔵

雲山は南画の技量を高めるため五回中国を訪れている。その際に描かれた画帖には干支や地名の記載があり、雲山の詳しい行程がわかる。

参考

- 『秦野の文化財第8集』秦野市教育委員会 昭和47年
- 苫野蕙山『南画の基礎知識』雄山閣 昭和62年
- 佐々木丞平・佐々木正子『文人画の鑑賞基礎知識』至文堂 平成10年
- 『大津雲山展図録』秦野市教育委員会 平成2年
- 日展史編集委員会『日展史6 帝展編一』社団法人日展 昭和57年
- 日展史編集委員会『日展史 文展出品目録』社団法人日展 昭和58年

『市制施行60周年記念事業 大津雲山展 鑑賞の手引き』

編集・発行 秦野市教育委員会生涯学習課文化財担当
〒259-1304 秦野市堀山下380-3
TEL 0463-87-9581

発行日 平成27年12月3日

『山水図』一幅 個人蔵



市制施行
六〇周年
記念事業

大津雲山展

鑑賞の手引き

開催期間 平成二十七年十二月三日(木)～十三日(日)

主催 秦野市教育委員会

会場

秦野市文化会館



おお つ うん ざん
大津雲山 (1885—1971)



明治18年、中郡東田原村（現在の秦野市東田原）大津角次郎の四男として生まれる。本名市造。菩提寺である金剛寺に仏弟子として入門したが、住職から雪舟の逸話を聞き、画で身を立てる決心をしたと伝わっている。父角次郎の理解を得て家に戻ってからは秦野に居住する南画家の山田永耕や森崎和三郎に師事し南画を学んだ。

明治38年12月、甲種合格で東京赤羽の工兵隊に入隊。兵役の終了が近くなった明治41年の秋に第2回文展を見学し、その際出品されていた松林桂月の画に感銘を受け弟子入りを志願する。だが、門下生のための部屋が空いていないという理由で最初断られ、一時、同じく南画の大家である小室翠雲に師事した。その後しばらくして、松林桂月門下への入門がかなう。

桂月に雲山の号を授かり、研鑽を積んでからは次第に画壇においても頭角を現していく。大正4年には日本南宗画会展において三等銅牌を受け、大正6、7年には天皇の御前で揮毫するなど、その活躍は目覚ましいものであった。特に帝展においては大正10年に行われた第3回帝展を皮切りに、第8回・第9回・第10回帝展に出品を重ねている。

雲山はその後も活躍を続けたが、太平洋戦争の戦火から免れるため、居を構えていた東京都麻布筈町（現在の港区西麻布）から郷里である秦野へと疎開、以降生活の基盤を秦野へと移した。

雲山の作品は市内に数多く所蔵されています。今回の展覧会を開催するにあたり、展示作品の借用や画像の掲載、情報提供など市民の皆様並びに関係者の皆様から多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。



《大黒天図》 一幅 個人蔵



《鍾馗図》 一幅 個人蔵

道釈画

道釈画は、名前の通り、道教及び仏教に関する人物画のこと。修行経験があり、中国文化に造詣が深かった雲山にとって、なじみ深い画題だったと考えられる。

山水図

山水は、中国の南宗画を元に発展した南画において最も一般的な画題である。雲山も好んで描いており今回の展示で最多の出展数を誇る。



《四季山水図》 四幅対 個人蔵

南画とは

南画とは、中国の「南宗画」の略語であるが、この言葉は、むしろ、江戸時代に伝来した南宗画を中心とする外来の絵画様式をベースに、日本独特の受容メカニズムによって生まれた、「日本的文人画」を意味する用語として定着している。当然その実態は、南宗画とも、また「文人」が余技として描いた絵画を意味する中国の「文人画」とも、異なる様相を呈している。

その「南画」の第一の特徴は、「文人」に寄せた熱い憧憬の思いである。日本の画家は、南宗画様式の模倣よりも、南宗画様式で描いた中国文人の技巧に拘らない作画姿勢や絵画理論、高い教養や幅広い趣味、更には脱俗の生き方そのものを学ぶことに情熱を注ぎ、品格高い「日本の文人画」の創造を目指した。

第二の特徴は、南画には、中国の北宗画や西洋絵画風の画も存在する点である。南宗画受容が、技術偏重により形骸化した狩野派へのアンチテーゼとしての新しい絵画創造の性格を有していたため、南宗画に限定されない広範囲の摂取がなされたのである。

第三の特徴は、南画は、本来の中国の「文人画」の定義とは相いれない、画を専門とする職業画人まで含んだ、多種多様な階層や職種によって担われたということである。まさに、日本的文人画と称する所以である。

解説：佐伯英里子〔多摩美術大学 美術学部講師〕